

令和5年度

発掘調査報告会

秋田県埋蔵文化財



2024.3.9 [土] 9:30-15:00

会場／秋田県生涯学習センター

主催／秋田県埋蔵文化財センター

協力／大館市教育委員会  
美郷町教育委員会

雄勝城・駅家研究会  
由理柵・駅家研究会

にかほ市教育委員会 能代市教育委員会  
横手市教育委員会 (五十音順)

# 目次

令和5年度県内発掘調査遺跡一覧表…表紙裏  
 令和5年度県内発掘調査遺跡位置図……………1  
**大巻Ⅰ遺跡**……………2  
**ヲフキ遺跡**……………4  
**大道遺跡**……………6  
**福島遺跡**……………8  
**十足馬場南遺跡（第4次調査）**……………10  
**史跡弘田柵跡（第157次調査）**……………12  
**蟹沢遺跡**……………14  
**行ヒ森遺跡**……………16  
**金沢城跡（第15次調査）**……………18

**史跡檜山安東氏城館跡（檜山城跡）**……………20  
**大館城跡**……………22

## 紙上報告

**寺沢遺跡**……………24  
**立浪遺跡**……………25  
**坂三塔遺跡**……………26  
**本荘城跡**……………27  
**上野小館跡隣接地**……………28  
**長岡森館**……………29  
 年表……………30

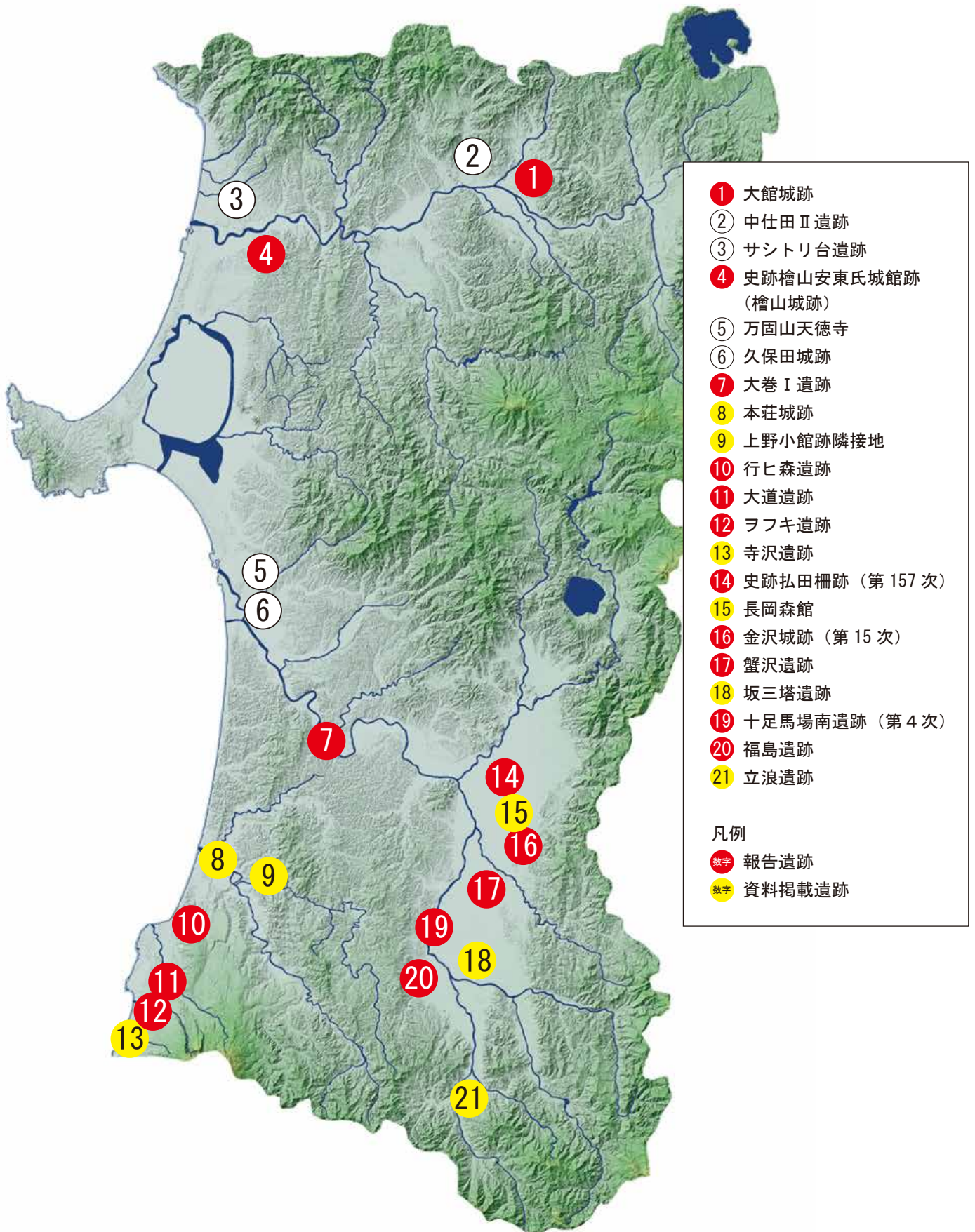
# 令和5年度県内発掘調査遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積 (㎡)	主な時代：遺跡の性格
1	<b>大館城跡</b>	大館市字中城	大館市教育委員会	1,188	中世・近世：城館跡
2	中仕田Ⅱ遺跡	大館市早口	大館市教育委員会	71	縄文：散布地
3	サシトリ台遺跡	能代市外荒巻	能代市教育委員会	359	平安：集落跡
4	<b>史跡檜山安東氏城館跡（檜山城跡）</b>	能代市檜山	能代市教育委員会	138	中世：城館跡
5	万固山天徳寺	秋田市泉三嶺根	秋田市教育委員会	95.9	近世：社寺跡
6	久保田城跡	秋田市千秋公園	秋田市教育委員会	463	近世：城館跡
7	<b>大巻Ⅰ遺跡</b>	秋田市雄和新波	秋田県教育委員会	5,300	縄文：集落跡 平安：集落跡
8	<b>本荘城跡</b>	由利本荘市尾崎	秋田県教育委員会	282	近世：城館跡
9	<b>上野小館跡隣接地</b>	由利本荘市上野	由理柵・駅家研究会	30	時代・性格不明
10	<b>行ヒ森遺跡</b>	にかほ市平沢	にかほ市教育委員会	1,725	平安・中世・近代：散布地
11	<b>大道遺跡</b>	にかほ市象潟町	秋田県教育委員会	2,600	縄文：集落跡

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積 (㎡)	主な時代：遺跡の性格
12	<b>ヲフキ遺跡</b>	にかほ市象潟町	秋田県教育委員会	590	縄文：集落跡
13	<b>寺沢遺跡</b>	にかほ市象潟町	秋田県教育委員会	2,000	縄文：狩猟場 平安：生産遺跡
14	<b>史跡弘田柵跡（第157次）</b>	大仙市弘田・美郷町本堂城回	秋田県教育委員会	162	平安：城柵官衙跡
15	<b>長岡森館</b>	美郷町金沢	美郷町教育委員会	30	時代不明：城館跡
16	<b>金沢城跡（第15次）</b>	横手市金沢	横手市教育委員会	300	平安・中世：城館跡
17	<b>蟹沢遺跡</b>	横手市平鹿町中吉田	横手市教育委員会	2,432	古墳・平安・中世：集落跡
18	<b>坂三塔遺跡</b>	横手市十文字町	秋田県教育委員会	850	縄文：集落跡
19	<b>十足馬場南遺跡（第4次）</b>	横手市雄物川町	雄勝城・駅家研究会	325	奈良：集落跡
20	<b>福島遺跡</b>	羽後町足田	秋田県教育委員会	3,220	縄文：集落跡
21	<b>立浪遺跡</b>	湯沢市下院内	秋田県教育委員会	4,000	縄文：集落跡

(太字は報告遺跡、資料掲載遺跡。番号は右頁の位置図に対応します。)





令和5年度県内発掘調査遺跡位置図

# 大巻 I 遺跡

秋田市雄和新波字大巻

大巻 I 遺跡は、秋田空港の南南東約8.8km、秋田道協和ICから南南西約7.5kmの地点に位置します。県南部から北西に流れる雄物川は、遺跡付近で大きく蛇行しており、遺跡は雄物川左岸に形成された自然堤防上に立地しています (①)。

雄物川の河川改修事業に伴って、昨年度は2,720㎡、今年度は5,300㎡の調査を行いました。

昨年度の調査の結果から、遺跡付近の地層は褐色の土の層と白っぽい砂の層が交互に重なっており、度重なる河川氾濫によって形成された地形と考えられます (②)。この褐色の土の層からは、土器や石器等が出土しました。昨年度の調査では、縄文時代前期と平安時代等の複合遺跡ということが分かっており、縄文時代前期の石器製作跡等が見つかっていました。

今年度の調査では、<sup>しょうどいこう</sup>焼土遺構125基、<sup>どこう</sup>集石遺構3基、土坑10基等が検出され、土器、石器等の遺物は、180コンテナ76箱分が出土しました。昨年度の調査と同様に、出土した縄文土器は、表面に矢羽根状の縄文や網目状の捺糸文が施されたものが多く、底面に縄文が施

されたものもあるなど、<sup>だいきしき</sup>縄文時代前期前半の大木式土器と考えられます (③)。検出された遺構のほとんどが、その時期のものです。縄文時代前期前葉は、現在よりも2℃程気温が高く、海面が内陸に入り込んでいたと考えられます。雄物川沿いの遺跡周辺も、この温暖な時期に度々河川氾濫があったようです。

焼土遺構とは、火を焚いたために周りの地面が赤く変色した痕跡を示すものです (④)。径1m程





の円形であったり、楕円形であったり、赤色変化した土の厚さも20cmと厚いものから5cm程の薄いものまで多様です。中でも注目されるのは、一つの焼土遺構の下に、褐色の土層を挟んで、別の焼土遺構が検出された例が複数あったことです(⑤)。ある時期の活動で焼土ができ、その後河川氾濫の時期に人々は遺跡から離れ、離水して活動可能になると再びこの地で活動した結果です。このような焼土遺構が検出される土層が、遺跡全体に3面ありましたので、縄文時代の人々は少なくとも2回の河川氾濫にあいながらもこの地での活動を繰り返したようです。

また、焼土遺構の近くで、剥片が狭い範囲の中にまとまって出土しました(⑥)。石を打ち欠いていった結果で、石器を製作した場と考えられます。昨年度の調査成果とあわせると、この遺跡では、石器製作もさかんに行われたようです。今年度出土した石器には、石鏃・石槍・石匙・石篋・異形石器・磨製石斧・凹石等の様々な石器があります。中でも特徴的な石器は、200点を超す石錘です。石錘は、網のおもりに使われたと考えられ、1か所で3点あるいは5点まとまって出土した所もありました(⑦)。

2か年の調査で、<sup>たてあな</sup>堅穴建物跡は見つかりませんが、火を焚いたり、石器をつくったり、魚をとったりといった活動が盛んに行われた場所であることが分かりました。この遺跡での活動痕跡が見られなくなる縄文時代前期後半には、北北東7.5kmの雄物川支流の淀川右岸段丘上に上ノ山Ⅱ遺跡という大集落が営まれています。

今後は、検出遺構や出土遺物の検討を進めるとともに、雄物川左岸で下流側7.5kmにあり、本遺跡と同時期の焼土遺構が検出された河原崎遺跡との比較検討も加え、縄文時代前期の人々の活動実態にせまりたいと考えています。



上ノ山Ⅱ遺跡

雄物川支流の淀川右岸段丘上に上ノ山Ⅱ遺跡という大集落が営まれています。

# ヲフキ遺跡

## にかほ市象潟町大砂川宇山屋

ヲフキ遺跡は、JR羽越本線上浜駅から南東約1kmに位置し、鳥海山麓の北西裾部、標高31m前後の西向き斜面に立地しています。遺跡の推定範囲は30万㎡を超えます。本遺跡ではこれまで4次にわたる発掘調査が行われ、縄文時代前期から晩期、平安時代、中世、近世に断続的に集落が営まれていたことが分かっています。

今年度は、第一次調査区の北東、昨年度調査区の南側、遺跡北端部の590㎡を調査しました (①)。



調査の結果、縄文時代前期後半の土坑22基、柱穴様ピット227基、土器埋設遺構3基を検出しました。

柱穴様ピットのほとんどは調査区の南東側に集中しています。北東方向に並び、調査区外へと続く2条のピット群は、東北地方の縄文時代前期に類例の多

い大型竪穴建物 (ロングハウス) の柱穴であったと予想されます (②)。大型竪穴建物の平面形は、長軸が10mを超え、短軸が4m程の長楕円形であったようです。柱穴の多くは切り合い関係にあり、同じ場所で何度か建て替えが行われていたようです。上部が削平されているため、炉に伴う焼土や住居の掘り込みは見つかりませんでした。

柱穴は、掘方内に大小の礫や石皿、磨石が入っているものが多く (③・④)、全て人為的に埋め戻されたと推定されます。礫は柱を支える根固め用の石ではなく、廃絶儀礼に伴うものと考えられます。





その他に、土器も確認されています(⑤)。そのうちの1基からは完形の深鉢形土器が出土しました(⑥)。柱穴は直径50cm、深さ約72cmで、土器は柱穴を20cm程掘り下げた所で検出されました。土器内には磨石や小礫が数点入っていました。この土器は、建物を建て替える際、使わなくなった柱穴の廃絶儀礼に伴う可能性があり、土器内の土壌を分析して詳細に検討していきます。



今年度の調査区は、縄文時代前期の竪穴建物跡と推定される柱穴群が検出されたことで居住域であることが分かりました。



昨年度の調査区からは、同時代の<sup>けつじょうみみかざり</sup>袂状耳飾などの副葬品を伴う土坑墓からなる墓域が見つかっています。このような遺構分布から、墓域と居住域からなる集落が存在していたと考えられます。集落内には、遺構が希薄な区域が存在しており、居住域と墓域を区画する空間であると考えています(⑦)。

縄文時代前期の大木式土器を伴う居住域と墓域で構成される集落は、大仙市<sup>うえのやま</sup>上ノ山Ⅱ遺跡で確認されていますが、日本海沿岸部では珍しく、今後、県内外の類例を調査して本遺跡の性格等を検討していきたいと思えます。



# 大道遺跡

## にかほ市象潟町関字大道

大道遺跡は、日本海沿岸東北自動車道象潟ICより南へ約1km、標高100～102mの台地上に立地しています(①)。遺跡が立地する台地は奈曾川の支流により開析されています。大道遺跡と同じ台地上には、縄文時代の新館遺跡、平安時代の上岩台遺跡が位置しています。日本海沿岸東北自動車道の遊佐象潟道路の工事に伴って2,600㎡の発掘調査を実施しました。



調査の結果、縄文時代中期の竪穴建物跡3棟、土坑1基、柱穴様ピット3基、時期不明の焼土遺構1基が見つかりました。調査区東側は斜面になっており、南西側の平坦面から緩斜面にかけて竪穴建物跡がまとまって確認されました。

竪穴建物跡のうち1棟は、長径3.3m、短径3.1m、深さ30cmの略円形に掘り込まれていました(②)。建物内に堆積した土の中からは土器や石器、剥片がまとまって見つかりました。床面からは、壁板を立てるための壁溝や柱穴、炉跡が見つかりました。炉跡は、石囲部と前庭部の2つの部位から構成される長さ1.5m、最大幅1.1mの複式炉で、建物の南側の床面に構





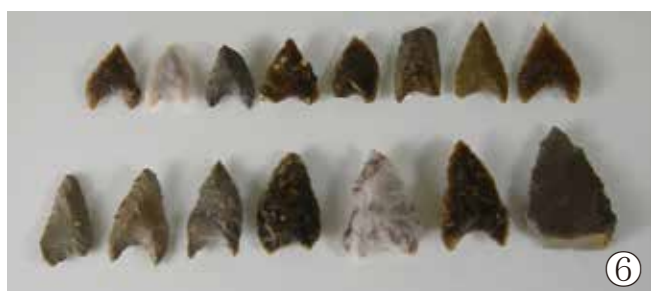
築されていました。炉を構成する石には、磨石や敲石が含まれていることが分かりました。また、建物の東側壁付近からは長さ52cm、幅32cm、厚さ10cm、重さ17.1kgの石皿が壁に沿うように斜めに立った状態で出土しました(③)。建物を廃絶する際に立てたと考えられます。

南側の竪穴建物跡は、長径4.5m、短径4.0mの略円形で床までの深さは40cmありました(④)。床面からは柱穴4基、北側には壁溝、南側では炉跡が見つっています。炉跡は、先の例と同じく石囲部と前庭部から構成される長さ1.7m、最大幅0.95mの複式炉で、床面中央から南側に向けて開いています(⑤)。建物内に堆積した土からは土器や石器が見つっています。他の建物と比較すると、この建物内からは石鏃とその素材が15点と多く見つっています(⑥)。また、黒曜石の剥片や碎片が確認されていることも特徴の一つです。竪穴建物跡に伴う炉跡は、いずれも石囲部と前庭部で構成されており、その形態から縄文時代中期後葉と考えられます。

調査区南西側では、竪穴建物跡の他に縄文時代の土器や石器を含む土の広がりを確認しました。石器の中には、黒曜石の剥片や碎片も含まれており、遺跡内で黒曜石製の製品を作った可能性も考えられます。

今回の調査で竪穴建物跡が見つかったのは、調査区南西側に限定されますが、深く土が削り取られた調査区西側にまで集落が広がっていたと考えられます。集落内では頁岩や黒曜石を素材とした石器製作が行われ、石皿などの礫石器を用いて廃絶儀礼を行っていた様子が見えてきました。

今後は、周辺にある同時期の集落遺跡の調査成果を参考に、複式炉の特徴や建物の廃絶儀礼について検討していきます。



# 福島遺跡

雄勝郡羽後町足田字福島

福島遺跡は、JR十文字駅から西へ約11km、道の駅「うご」から北へ約4.1kmに位置します。西馬音内川と新町川に挟まれたひばり野台地の北端に立地しています (①)。

本遺跡は、昭和30年代の故山下孫継氏による試掘調査の結果、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが確認されています。また、平成4年には羽後町教育委員会により、調査区北東隣接地などが発掘調査され、縄文時代中期・晩期の土器や石器、少量の須恵器や土師器が出土しています。

調査の結果、縄文時代中期前半のフラスコ状土坑25基、土器埋設遺構5基、捨て場1か所、土坑11基、焼土遺構1基、柱穴様ピット73基が検出され、集落の一部であることが分かりました。

調査区南端には東西方向に埋没沢があり、大量の大木7b～8a式期の土器片が出土しました (②)。出土状況から、縄文人が使わなくなった土器等を沢に廃棄した捨て場と考えています (③)。捨て場から出土したのは主に縄文土器で、沢の中心部に大木7b式が多く、北側の浅い場所では8a式が多い傾向にあります。土器以外の遺物は非常に少ないのが特徴です。

捨て場から20m程北東の緩斜面では、縄文時代のお墓と考えられる土器埋設遺構が見つかりました (④)。土器の底部を意図的に打ち欠いたあとに、穴を掘って埋めています。1基だけ口縁部が残存している土器があり、大木8a式期であることが分かりました。

土器埋設遺構群の周辺では柱穴様ピット群が検出されています。炉跡と考えられる焼土遺構もあることから、住居があった可能性があります。今回の調査では見つかりませんでした。

土器埋設遺構群や柱穴様ピット群の北東約30m、調査区で最も標高の高い場所から緩斜





面にかけてフラスコ状土坑が25基見つかりました(⑤)。これらは食料を貯蔵するために掘られた穴と推測され、最も大きいもので開口部1.2m、深さ1.9m、底面直径3mありました(⑥)。フラスコ状土坑群のある場所は、後世の畑地利用により削平されているため、本来の深さはもっと深かったと考えられます。ほぼ全てが人為的に埋め戻されており、埋め戻しの途中で火を焚いたり、土器を横位に埋め置く等の廃絶儀礼を行ったと考えられるものもあります(⑦)。また、埋めた後、上部に<sup>いしがいる</sup>石囲炉を構築して火を焚いている特異なものもあります(⑧)。

調査区は、遺構の種類ごとの分布傾向から、フラスコ状土坑の集中する尾根部、土器埋設遺構や柱穴様ピット群がある南側緩斜面部、捨て場が形成された南端沢部に分けることができます(⑨)。今回の調査区で堅穴建物跡が検出されなかったことから、調査区西側の沢を挟んだ緩斜面か、調査区から続く東側段丘上に集落の主体があったと考えています。

秋田県内において、縄文時代中期前半の大木式土器がまとまって出土することや、県南でフラスコ状土坑がまとまって検出された調査例は少なく、今回の調査成果をもとに、今まで県内では判然としなかった縄文時代中期前半の生活を明らかにすべく今後検討を進めていきます。



⑤



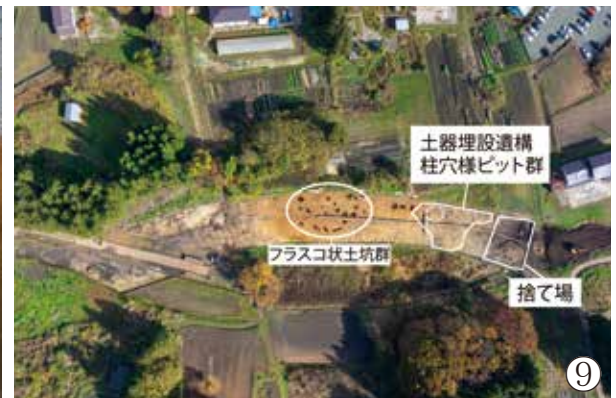
⑥



⑦



⑧



⑨

# 十足馬場南遺跡 (第4次調査)

横手市雄物川町造山字十足馬場

十足馬場南遺跡は、JR奥羽本線横手駅の西南西約11km、横手市雄物川町造山にある標高50mの砂礫段丘上に立地します。調査を実施した「雄勝城・駅家研究会」は平成31年4月発足の民間団体です。

活動の目的は、『続日本紀』天平宝字3年〔759〕年9月26日条に、「陸奥国桃生城と出羽国雄勝城を造営する」として史料上に認められるも、未発見の城柵である「雄勝城」や官衙（役所）、駅家（官道・駅路沿いに設置された施設）、寺院等の関連する諸遺跡の所在地を特定すると共に、これらの遺跡が古代の地域社会に及ぼした影響を考究することです。

研究会としての発掘は、地元の協力団体等の協力・支援を得て、令和元年に蝦夷塚古墳群、令和2年に十足馬場北遺跡と十足馬場西遺跡、令和3年に十足馬場西遺跡第2次調査を実施しました。十足馬場西遺跡からは、「驛長」銘の墨書土器（①）が出土し、同遺跡近辺に雄勝城造営時期と重なる駅家あるいはその関連施設が存在していた可能性が高いと推定しました。

令和4年は、十足馬場西遺跡の南東側に隣接する十足馬場南遺跡の調査を行いました。同遺跡は平成19年に弘田柵跡調査事務所が実施した関連遺跡の



十足馬場南遺跡第4次調査遺構配置図

②

調査で新発見、平成21年にも第2次調査が実施されていることから第3次調査となります。その調査では奈良時代のおおみぞの大溝跡が検出されました。当該期の大溝は、冒頭に引用した桃生城跡（宮城県石巻市）の外郭と城内の建物群を区画する施設として確認されています。大溝跡の発見は、雄勝城特定に向けた大きな前進と判断し、令和5年も継続調査、すなわち第4次調査として実施することとしました。

その結果、東西方向に延びる大溝跡（SD07、②）は上幅最大4.5m、土層断面観察から新旧2時期となることが確認できました。また、大溝は一部で途切れ、その南側には一辺90cm四方、隅丸方形の柱掘方が3.3m（11尺）間隔で2基検出され、おそらく1間四方の櫓状建物（SB52）であった可能性が考えられます。さらに大溝北端で、これと並行するように溝跡が断続的に見つかると、小柱穴の存在や溝底面の凹凸



を考慮すれば、<sup>ざいもくべいあと</sup>材木堀跡 (SA14) であったと考えています。重複関係から材木堀が先行し、これを切り込む形で大溝が構築されたことは明確です。すなわち区画施設としてみれば、SA14→SD07 (旧)→SD07 (新) の3時期変遷となるようです。



大溝跡の北側から3棟の<sup>たてあなたてもものあと</sup>堅穴建物跡 (SI13・23・51) が検出されました。このなかで、SI23からは<sup>みなみひきすえきつき</sup>南比企産の須恵器坏 (③) が、SI51から南武蔵産の<sup>はじき</sup>土師器坏 (⑤内面、⑥外面) が出土しました。

前者は埼玉県比企郡、後者は内外面赤彩の皿状の器で東京都府中市の武蔵国府周辺で多くの出土例があるものです。また、SI13からは「奈波」と墨書された須恵器坏 (④) も見つかりました。

今回の第4次調査による最大の成果は、区画施設が3時期の変遷を辿ることと見ます。雄勝城は史料上、西暦759年に創建され、おそらく801年頃に払田の地に移転 (払田柵) したとする説が有力です。本遺跡出土遺物の時期が8世紀代に限定され、9世紀の遺物が認められないこととも合致します。雄勝城が存続していた期間を約40年とすると、途中で一度の改築が予想されます。すなわち2時期の変遷です。一方で、本遺跡の西側約2.5kmに位置する<sup>すえだてかま</sup>末館窯 (雄物川町今宿) は、役所や寺院等で使用する須恵器を生産した施設です。その操業開始期が8世紀第2四半期であることは、759年の雄勝城造営以前に“何らかの施策”が実施されたことを示しているはずで、その施策とは『続日本紀』天平5年〔733〕12月26日条にある「雄勝村に郡を建て民を居く」、すなわち雄勝郡設置 (たとえば雄勝郡家=郡役所開設) に関連する事業と推測します。この前提に立てば、本遺跡の材木堀建設



とは雄勝郡設置に関連する事業となり、20数年後に大溝を区画施設とする雄勝城等の造営に至るのではないのでしょうか。

最後に、本遺跡調査にあたり青山学院大学文学部史学科考古学実習コースの学生・教員の協力を得たこと (⑦) を明記しておきます。

(雄勝城・駅家研究会)

## 史跡<sup>し せき</sup> 弘田<sup>ほつ た</sup> 柵<sup>さく</sup> 跡<sup>あと</sup> (第157次調査)

大仙市<sup>ほつ た</sup> 弘田<sup>ほつ た</sup> ・ 美郷町<sup>ほん どう</sup> 本堂<sup>ほん どう</sup> 城<sup>しろ</sup> 回<sup>まわり</sup>

史跡弘田柵跡は、古代律令国家が対蝦夷政策の拠点として設置した軍事と儀式を司る<sup>しゅうさく</sup> 城柵の一つです。平安時代の9世紀初め(802年ごろ)に造られ、10世紀の後半まで存続しました。

遺跡は沖積地に立地する<sup>しんざん</sup> 真山<sup>ながもり</sup>、長森という二つの丘陵を大きく取り囲む<sup>がいさく</sup> 外柵(材木塀)と、長森だけを囲む<sup>がいかくせん</sup> 外郭線(築地塀と材木塀が連結)からなっています。外柵は、東西1,370m、南北780mの楕円形で、外柵内の面積は878,000㎡です。外郭線は、東西765m、南北320mの楕円形で、外郭内の面積は163,000㎡です。外柵、外郭線ともに東西南北に八脚門がつきます。長森の中央には主要な施設である政庁があり、板塀で囲まれています。

昭和5(1930)年に最初の調査が行われ、翌昭和6(1931)年に秋田県初の国指定史跡となりました。昭和49(1974)年度からは秋田県が継続的に発掘調査を行っています。

第10次5年計画(令和元～5年度)の最終年に当たる第157次調査は、外柵南門と外郭南門を結ぶ南大路の東側隣接地を発掘調査しました(①・②)。この地区の微地形と遺構、遺物の分布状況及び遺構の変遷を把握することが目的です。

調査の結果、城柵が創建された9世紀初頭、この一帯はほとんどが長森の東側から南西に流れる河川の河川敷で、東西方向の小規模な河道があり、西側が微高地、東側が低地だったことが分かりました(⑦)。この時期の遺構、遺物はなく、外柵南門と材木塀がある以外にあまり利用されていなかったようです。

微高地では、9世紀中葉以降と推定される<sup>たてあな</sup> 竪穴建物跡(③)、溝跡(④)、土坑などの遺構が検出され、9世紀中葉から10世紀前葉の遺物が多く出土しました(⑦)。竪穴建物跡は方形で、南東壁2.4m分を検出したものです。確認面の埋土には





炭化物が多く混じり、9世紀中葉の須恵器<sup>すえきつき</sup>坏やロクロ不<sup>はじき</sup>使用の内黒土師器<sup>かめ</sup>坏が出土しました。第7次調査では、外柵南門の北西で、嘉祥<sup>かしょう</sup>二年（西暦849年）の紀年木簡や土器が土坑内から出土しています。外柵の消失は西暦830～850年ごろと推定されるので、ちょうど外柵消失の前後から、外柵南門周辺の微高地が広範囲に利用され、居住も含め何らかの活動が行われていたことが分かりました。東側の低地及び北側の微高地は、遺構、遺物ともにほとんどありませんでした。

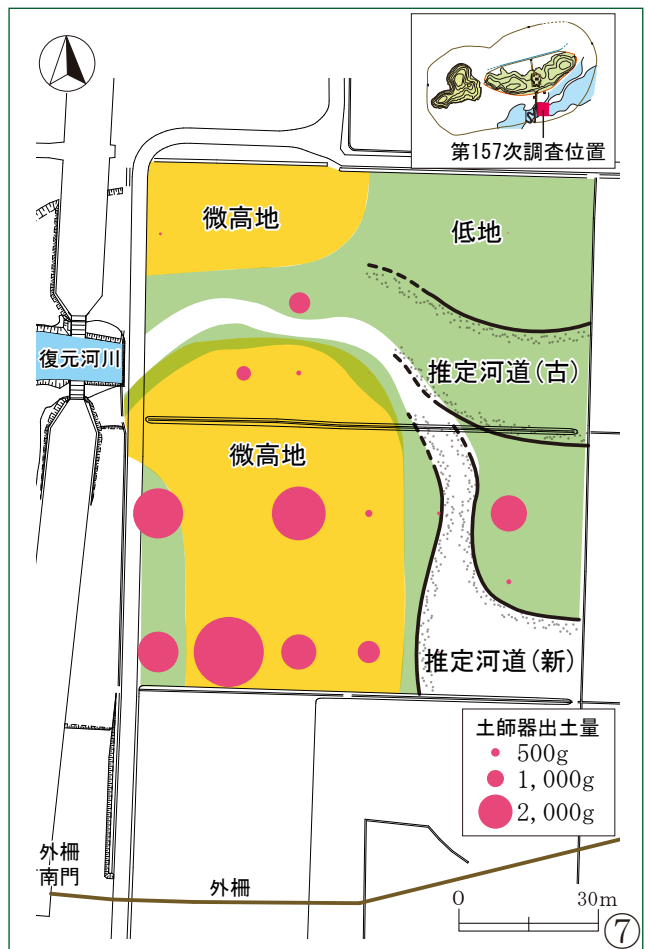


長森の南側では、9世紀後葉から10世紀初頭の洪水で堆積した粘土層が広範囲に認められます。東側の低地や小河道もこの粘土層に覆われていました。東西方向の小河道の一部は、微高地の東縁に沿って北流する新たな流路に変わり（⑦）、その後まもなく十和田噴火による火山灰が降下しています。河道の堆積物は泥炭が主であることから



（⑤）、水流の流速はほとんどなく、火山灰の降下後は長期間にわたって湿地化が進んだと推測されます。

東側の低地では、洪水及び火山灰降下を経た10世紀前葉～中葉に構築された土坑群が検出され、遺物も出土しました。土坑の一つは直径約90cm、深さ20cmの円形の土坑で（⑥）、埋土は炭化物が多く混じる埋め立て土でした。底面に土師器<sup>かめ</sup>甕の大破片と小型甕の口縁部破片が重ねて置かれ、隣接して炭化物が集中する部分がありました。何らかの祭祀に関係する遺構と考えられます。この時期には、小河道を挟んだ東西に利用範囲が拡大したようです（⑦）。



10世紀後葉の遺物は出土しておらず、そのころにはこの地区の利用は低調になったと推測されます。

第157次調査では、微地形と遺構、遺物の分布状況やその変遷を広範囲に把握するため、遺構精査はほとんど行なっていません。来年度以降、遺構を精査して内容の把握を進めていく予定です。

## 蟹沢遺跡

横手市平鹿町中吉田字蟹沢

蟹沢遺跡は、令和4年度に行った試掘・確認調査で見つかった新発見の遺跡です。遺跡は、JR横手駅から西南西約5.9kmの位置にあり、遺跡の東約450mにはかつて大戸川本流であった大戸川堰が、西約150mには弥十郎堰が北流しています。現在の発掘調査区は周囲の水田よりも標高がやや高いことから、蟹沢遺跡は前述の小河川の浸食や氾濫による堆積によって形成された、南北に細長い微高地（自然堤防）に立地しています（①）。

横手市教育委員会では、今年度実施された県営ほ場整備事業に伴い、遺跡総面積約5,600㎡のうち約2,400㎡の発掘調査を実施しました。今回の調査の結果、堅穴建物跡2軒・掘立柱建物跡5棟（柱穴155基）・土坑4基、井戸3基が見つかり、蟹沢遺跡は古墳時代・平安時代・中世の集落跡であり、主たる年代は秋田県内で極めて事例の少ない古墳時代であることが判明しました。

調査区北端にある古墳時代の堅穴建物跡（SI15）は、一辺が約8.6m（想定面積約74㎡）の巨大な建物跡で、全体の1/3以上は隣接する民家の下に保存されています（②）。建物跡は旧表土層から検出されましたが、床面がほぼ露出している状況でした。建物跡の北側ははっきりとした貼り床層が確認できず、礫層が露出しており、削平の度合いが大きいです。建物跡の四方を巡るように幅約50cmの壁際溝が確認され、溝底面からは壁材の痕跡と、鋤等の工具によって掘削された痕跡が確認されました。土層断面の観察から、建物の壁材は抜き取られ、解体されたと考えられます。建物跡の内部からは2本の支柱穴が確認されたことから、基本的には4本柱で上屋を支える構造であったと想定できます。また、建物跡南西辺には、4本の溝が確認されました。これは「床面小溝」と呼ばれるもので、建物内の空間を分ける間仕切り溝、ベッド状の施設などの機能が想定されていますが、これについては今後の検討課題です。





この建物跡に隣接する土坑（SK97）からは、古墳時代の土器が大量に出土しました（③）。その多くは土師器と呼ばれる素焼きの焼き物ですが、このほかに須恵器甕1点出土しました。古墳時代の須恵器甕は秋田県内では初めての出土です。須恵器は穴窯での焼成や回転台の使用など、当時の最先端技術で製作された焼き物で、古墳時代中期（今から1600年ほど前）に朝鮮半島から製作技術が伝わり、大阪府の堺市一带に所在する陶邑窯跡群で盛んに生産されました。今回出土した須恵器は胎土や焼成の具合から陶邑産である可能性が考えられます。この須恵器甕の頸部には凸帯が巡り、シャープな櫛描波状文が施されているのが特徴です（④）。

調査区南端にある古墳時代の竪穴建物跡（SI133）は、4.5m×4m（想定面積約18㎡）の建物跡で、先に見た竪穴建物跡より小ぶりですが同一の方向を向きます。この一帯は古墳時代当時の標高が高かったと考えられ、昭和40年代頃の耕地整理によって大きく削平を受けており、耕作による攪乱が床面にまで及んでいました。この建物跡の上面（水田造成土）からは古墳時代の土器がまとまって出土しており、この建物跡に帰属するものと考えられます。この建物跡も幅約20cmの壁際溝が確認され、この溝を切るように柱穴が配置されています。このことから、この建物跡は壁立式（屋根を地面までふきおろさない建物）であったと考えられます（⑤）。

今後は出土遺物などから、集落が営まれた時期について詳細に検討するとともに、横手市内に所在する古墳時代遺跡との関係性や、他地域との地域間交流の様相について考える必要があります。

（横手市教育委員会）



# 行ヒ森遺跡

ひらさわ あざおこない もり  
にかほ市平沢字行ヒ森

行ヒ森遺跡は、JR羽越本線仁賀保駅から南南東に約0.9km、日本海の沿岸部から約1.4kmの象潟泥流台地上に立地します。周辺には標高18～22m前後の流れ山が点在しています。調査区は標高12.6mに位置し、南東側で流れ山に接しています。周辺は水田で、遺跡の現況は休耕田でした (①)。

市の若者支援住宅整備事業に伴う試掘調査で発見され、建設用地に含まれる約1,725㎡について、記録保存を目的に発掘調査を実施しました。

調査の結果、多数の柱穴様ピットと土坑、井戸状遺構2基、土師器が溜まった窪地や石組暗渠が検出されました (②)。

遺物は平安時代の土師器が最も多く、須恵器や製塩土器も出土しました。また、中世の青磁、宋銭のほか、時期が分かっていない陶磁器、石器、木製品や金属製品なども出土しました (③・④)。

調査区の東側からは、多数の柱穴様ピットが検出されました (②A)。このうち、柱根が残っている柱穴が2基確認できました。まだ調査中ではありますが、複数の掘立柱建物を構成すると考えられます。

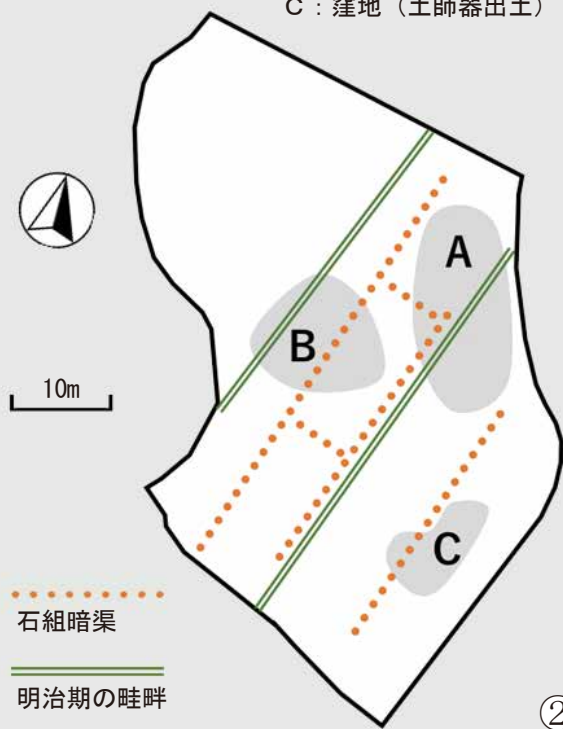
調査区の中央部、前述の柱穴様ピット群の西側からは十数基の土坑が検出されました (②B)。大きなものだと長軸が約3m、短軸が約1.5mあります。数は少ないものの、木製品が出土しました。また、直径約1.2mの円形の井戸状遺構が1基検出されました。

調査区の南東部では、窪地から土師器がまとまって出土しました (②C・⑤)。元は遺跡内を川が流れており、捨てられた土師器が川の浅いところに流れて溜まったものと考えられます。



遺構位置図

- A : 柱穴様ピット群
- B : 土坑群
- C : 窪地 (土師器出土)





調査区の南側には土坑と柱穴様ピットが点在していました。このうち直径約80cmの円形をした土坑が1基あり、すぐそばの柱穴からは柱根が出土しています(⑥)。井戸と、井戸の関連施設の柱穴ではないかと考えられます。

調査区中央～東側の広い範囲からは、石組暗渠が検出されました(⑦)。先述の遺構よりも上の層にあり、明治期以降の土地改良でつくられたと考えられます。遺跡周辺の地域では、にかほ市平沢出身で秋田の三大農聖と称される齋藤宇一郎さいとう うちろう かん でん ぼ こうが乾田馬耕を広めました。この石組暗渠は比較的新しい時代のもではありますが、市の偉人の功績に関連する重要なものと考えています。

遺跡の周辺には、官衙関連遺跡である立沢遺跡たてさわや家ノ浦Ⅱ遺跡いえのうら、官道跡が見つかった清水尻Ⅱ遺跡しみずじりがあります。これらの遺跡では製塩遺構や製塩土器が確認されています。行ヒ森遺跡では製塩遺構はなかったものの、製塩土器が出土しました。近隣の遺跡と同様に、古代の官道に隣接し、製塩を通じて関わりがあったものと考えられます。

今後は整理作業を進め、自然科学分析の結果も加えながら、遺跡の性格や周辺の遺跡との関係について明らかにしていきます。

(にかほ市教育委員会)



かね ざわ じょう あと  
**金沢城跡** (第15次調査)

かね ざわ あざ やす もと だて  
**横手市金沢字安本館**



現在、横手市教育委員会では、後三年合戦の最終決戦地である金沢柵を探索するための調査を行っています。これまでの発掘調査では、金沢城跡西麓部で古代の柵列を、西の丸では15世紀前後のものと考えられる大規模な堀と土塁を、本丸・北の丸では、戦国大名小野寺氏に関わる遺構・遺物を検出しました。また、金沢柵の時代に相当する11世紀代の堀と土塁で区画された竪穴建物跡を南東尾根部で確認しています。このように金沢柵の時代やその前後の時代に、金沢城がさまざまな人々によって使用されていたことが調査によって明らかになっています (①)。

今回調査を行ったのは、現在相撲場がある北の丸から北東方向へ尾根を下った範囲で、「北の丸北東部」と呼称しています。北の丸北東部の尾根下方は、厨川の浸食によって形成された急斜面になっています。

北の丸北東部には、広範囲に造成された平場が存在しています。この平場は令和4年度に実施した現地踏査の際に塚状の地形が確認されており (②)、平安時代末から鎌倉時代前期にかけての経塚である可能性を想定していました。仮に、この塚状地形が前述の時代にかけての経塚であった場合、この平場は戦国大名小野寺氏などによる地形改変を受けていないことになります。今回の調査では、塚状地形の年代や性格、平場の形成時期、遺構・遺物の有無を確認することを目的として、発掘調査を実施しました。

塚状地形は、長軸10.1m、短軸8.0mの南東から北西方向に長い不整形を呈しており、現況の地表面からの比高差は80cmを計ります。発掘調査の結果、塚状地形は、大部分が盛土によるものではなく、旧地形を削り出すことで形成されていることが明らかになりました。また、これが経塚であれば、経筒などの外容器に入れて埋納した際の埋納施設が存在するはずですが、今回の調査では確認されませんでした。

調査によって塚状地形の性格は明らかになりませんでした。この塚の東に隣接して、中世墓を検出しました (③)。墓の規模は、掘り方は約1m四方ですが、掘り方の中には60cm四方で木棺などの





板を据えた痕跡が確認されました。周囲には幅約50cmの周溝が巡り、南方向で一部途切れます。墓の中からは、鉄製品のほか、副葬品とみられる<sup>こうぶつうほう</sup>洪武通宝や<sup>しだいとうほう</sup>至大通宝の<sup>もちゅうせん</sup>模鑄銭を含む50枚の銭貨が出土しました（④）。

調査区の西側には、カマド状遺構とみられる遺構を検出しました（⑤）。土層の堆積を確認したところ、カマド天井部が崩落したような堆積状況を示しており、炭化物や焼土を多く含み、火葬に関わる施設である可能性が考えられます。先述の墓やカマド状遺構のほか、塚状地形の西側には溝が検出されており、これを墓の周溝とみれば、この平場に火葬墓や土坑墓などの墓域が展開した可能性があります。

今回の調査では、初めて北の丸北東部の発掘調査を行いました。金沢柵段階に遡る遺構・遺物は確認されませんでした。地山削り出しによって形成された塚状地形とともに、中世墓やカマド状遺構が検出されました。今回の調査を通して、金沢城跡の北東方向に墓域が展開する可能性を想定できるようになったのは、中世後期における金沢城の城郭構造を考えるうえでも大きい成果であったといえます。

（横手市教育委員会）

## 史跡檜山安東氏城館跡（檜山城跡）

能代市檜山字古城

檜山城跡は米代川河口から約12km内陸に入った標高146m程の霧山につくられた山城の跡です。明応4（1495）年に安東忠<sup>ただすえ</sup>季が築いたとされ檜山安東氏代々が居城としました。戦国期の愛<sup>ちかすえ</sup>季、実<sup>さねすえ</sup>季の時代を経て、秋田氏を名乗った実季が国替えになった後は、元和6（1620）年に破却されるまで佐竹領内の城として使用されました。昭和55年に大館跡、茶臼館跡、国清寺跡とともに国の史跡に指定されています（①）。



檜山城跡の最寄駅は、JR奥羽本線東能代駅で、城跡は車で南へ約5kmに位置します。国道7号線を東に向かい、檜山方面へ右折して南下し、史跡を構成する大館跡を左に見ながら進むと、正面に檜山城跡が見えてきます。途中、旧羽州街道の松並木も見ることができます。

8年目となる今年度は令和元年度から継続して、通称「本丸」の5年目の調査を行いました。今年度の発掘調査面積は約138㎡で、これまでの調査面積を合わせると約611㎡となり、曲輪<sup>くるわ</sup>の面積を約3,000㎡とすると、平場全体の約20%を調査したことになります。

通称「本丸」は、これまで調査を継続してきた古城地区で最も標高が高く、主要な曲輪と考えられており、面的に調査区を設定し、土の堆積と建物跡の有無を確認することを目的に調査を行ってきました（②）。今年度は、これまでの調査で確認されていた建物跡になる可能性がある柱配置の延長上を調査し、建物の規模を確認しました。調査区西側では盛土によって曲輪が広げられていて、柱の並びが等間隔にあったと仮定すると、盛土上では柱跡を検出できませんでした。これにより西側の端が確定し、建物の規模が明らかになりました。西側の盛土は今回の調査で面的に確認され、曲輪を広げていたことが明確になりました（③）。盛土が初めに行われた最下層に近い層からは古手のかかわりの底部が出土しました（④）。檜山城跡の築城が15世紀末と考えられているのに対して、数百年も前の



の平安時代の遺物と考えられます。城の作りやこれまでに出土している遺物全体を勘案して、すぐに平安時代にこの平場が作られたと言うことはできませんが、安東氏が居城とする数百年も前から何らかの人の営みがあったことがうかがえます。

調査区東側でも西側と同様に盛土が確認でき、曲輪全体が土木工事で現在の形に作られたことが明確になりました。

また第5次調査で確認した



土の堆積や元の地形の様子を再度確認するために曲輪の東西方向に溝状の調査区を設定しました。発掘調査で見られる檜山城跡の地山は、基本的には砂ですが、一部で粘土質の地山がみられます。現在の理解では丘状の地形を削り、平らに作り替えた際に、地層の浅いところにあった粘土質の地山が元の地形の周縁部に残っていると考えています。平場が砂質なのは、粘土質の下の砂層まで削られているためと考えられます。

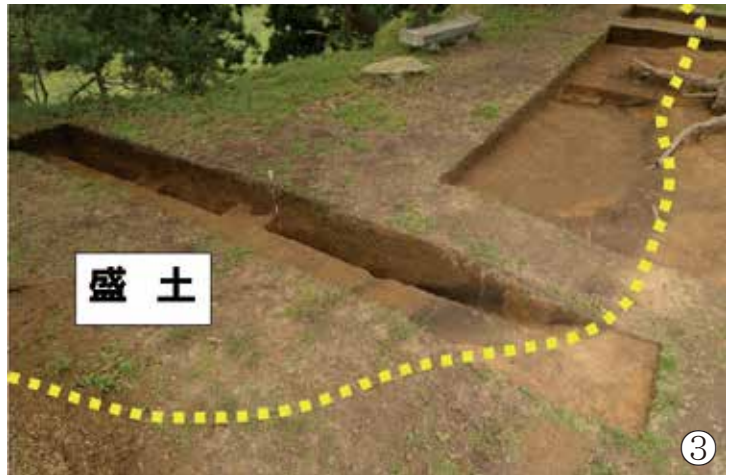
これまでの調査では、鉄滓や坩堝など金属生産に関わる遺物が見つかっていましたが、どこで生産活動が行われているかはっきりしませんでした。今年度調査では、調査区の北西側の黒褐色土の広がり(⑤)の中から、熱い鉄を叩いて鍛えたときに飛び散った「鍛

造剥片たんだうはくぺんが見つかり、鍛冶炉であった可能性が高まりました。時期は未確定ですが、通称「本丸」においても生産活動があったことを初めて確認することができました。一方で、調査区東側の黒褐色土の広がりからは遺物が集中して見つかっており、その中から出土した鉄滓は鉄製品の素材となる鉄を作る製錬炉から排出された可能性があります。ある程度の面積を持った鉄生産施設があったことが想起され、檜山地域のどこかから城内に持ち込まれたものかもしれません。

前述した遺物のほか、中国産染付、白磁、青磁せいじや、葉茶壺はちやつぼ、天目茶碗てんもく、国産の瀬戸美濃せとみの、唐津の皿や碗、越前の播鉢はりばちなどの陶磁器が出土しています。今回出土した青磁には鎬蓮弁しのぎれんべんが見られ、13世紀頃の碗と考えられます。これも前述のかわらけとともに檜山城築城以前の年代になります。出土遺物の

主な年代は戦国時代から江戸時代初めですが、古手の遺物はこれまでも数点見ついています。金属製品では、多数の釘くぎのほか詳細不明の板状の鉄製品、鉛の可能性のある鉄砲の弾、青銅の装飾具や小柄こづかの柄えの部分が見つかりました。

(能代市教育委員会)



# 大館城跡

## 大館市字中城

大館城跡は、大館市街地の中心部、米代川の支流である長木川の左岸の大館段丘北縁に位置する中世～江戸時代の城跡です。大館段丘は南側を米代川、北側を長木川に挟まれた、西向きの巨大な舌状の段丘で城跡部分の標高は69～71mです。

大館城は、16世紀後半に浅利勝頼が築城したといわれ、浅利氏滅亡後は秋田（安東）氏の支配下に置かれました。その後、佐竹氏の出羽国への国替えの際、慶長15年（1610）に佐竹氏一門の相場義成が大館城代に任命されました。義成は、大館城の改修・拡張や町割を行いました。慶応4年（1868）の戊辰戦争により南部藩の攻撃を受け落城しました。その後、本丸部分は桂城公園として整備され今日に至ります。



今回の大館城跡の発掘調査は、大館市本庁舎建設工事と周辺の附属施設の整備に伴うものです。本丸～外堀の一部を平成28～令和5年度にかけて発掘調査を実施し、今年度が調査最終年度となります。昨年度までの調査面積は5,141㎡です。

今年度は、昨年度に引き続き大館市役所旧庁舎および駐車場部分を対象に発掘調査を行いました。調査範囲

は大きく2つのエリアに区分され、一つは昨年調査を実施し、外堀や城内へと続く道跡とそれらに関連すると考えられる柱穴列が確認されたエリアを一部拡張した部分です。もう一つは大館城代家老を務めた「前小屋氏」とその一族の邸宅が位置していた部分の調査を実施しました（調査総面積



1,188㎡) (①)。

外堀部分の調査では、新たに4条の柱穴列が確認されました (②)。いずれの柱穴列も東西方向に延びており、うち2条の柱穴は約30～40cm四方の隅丸形状の平面プランを持ち、柱穴間の距離は概ね1.8mを測ります。この柱穴列は、大館城の外堀と並行して設けられていることから外堀に関連する柵列もしくは塀の跡と考えられます。もう2条

の柱穴列は直径20～30cm程度の小型の円形状の平面プランを持ち、柱穴間の距離はこちらも概ね1.8mを測ります。この柱穴列は、昨年度の調査で確認された大館城内外を繋ぐ道路と想定される範囲を横断するように設けられていることから、大館城が機能していた頃とは別の時代に作られたものかも知れません。また昨年度に引き続き、道跡に並行する柱穴列の続きが確認されています。これらは道に付随する塀の痕跡であると考えられます。

前小屋氏の宅地部分の調査では多様な遺構が確認されました。主な遺構として、礎石建物跡1棟、



ほったてばしらたてもあと ちゅうけつ  
掘立柱建物跡2棟、柱穴群、井戸跡、不明遺構等が挙げられますが、このエリアは、旧庁舎建設時の工事掘削により、あまり残存状況が良好ではありませんでした。そのため特に柱穴群においてはそれぞれの対応関係や配列状況が不明なものも多く、建物跡として復元できないものも多いのが現状です。

建物跡3棟のうち1棟は大館城跡では珍しい礎石を用いた建物です(③)。調査時点では、旧庁舎の建設工事の際、削平を受けたことにより僅かに5個の柱穴が確認できたのみですが、配列状況と礎石が伴う特徴から建物跡と判明しました。柱間は概ね1.8mを測ります。この建物跡は享保13年(1728)に作られた大館城下絵図をもとに配置位置を推測すると、かつて「前小屋鞆負」という大館城代の家老を務めた重臣に関する建物跡であると考えています。もう2つは柱穴の規模が異なる建物跡です(④)。この建物跡は重複する位置関係にあることから、異なる時期に建てられたものと考えています。前述した絵図をもとに推測するとこちらの建物跡は前小屋氏の一族である「前小屋崑弥太」に関すると考えられます。



今年度の調査では少し変わった遺構も検出されました(⑤)。SX1105と呼称するこの遺構は、長径約4.3m、短径約2.6m、検出面からの深さ約40cm程度の規模を持ちます。特徴的な点として、床面に黄橙褐色粘土を人為的に張り付ける構造を持ちます。また内部には30cm程度の礫が充填されていました。この礫は遺構内部に投棄されたものと考えられますが、何らかの機能を意図して充填した可能性もあります。また調査の際、底面の粘土層を取り除くと、直下から井戸跡が検出されました。この井戸跡の土層堆積を確認したところ、人為的に短期間で埋め戻した痕跡が確認できたことからSX1105を構築した際に埋め戻されたことが想定されます。また井戸の底から16世紀末期に作られた肥前産陶器が出土していることから、この井戸は佐竹氏入部以前に使用していたと考えられます。一方、SX1105は床面の粘土層直上や礫層中から17世紀初頭～前半頃に作られた陶磁器がまとまって出土していることから佐竹氏入部直後に作られたことが考えられますが、この遺構はなんのために使われたものなのか現時点ではよく分かっていません。



今年度の調査で平成28年から継続して実施していた大館市本庁舎建設に関連する大館城跡の発掘調査は終了となります。今後は報告書の刊行にむけての作業となりますが、発掘調査で得られた情報を多くの方々に知ってもらえるようにしたいと思います。  
(大館市教育委員会)

## 寺沢遺跡

にかほ市象潟町小砂川字寺沢

寺沢遺跡は、JR羽越本線小砂川駅から南に約1.5kmにあって、山形県境まで約1.5kmの距離にあります。鳥海山麓の西裾部、標高約40～55mの北向き斜面地に立地しています(①)。遺跡の西側約0.4kmには古代の製塩に関する遺構や遺物が見つかったカウヤ遺跡が所在しています。



調査は、今年度と来年度の2か年行われることとなっており、今年度は2,000㎡を調査しました。調査の結果、平安時代の焼土遺構5基、土坑2基、柱穴様ピット34基、河川跡1条、縄文時代の陥し穴状遺構1基を検出しました。



遺構は調査区の中央部、標高約42mの平坦地に集中しています。また、平坦地には西から北へ走る河川跡があり、河道は鳥海山由来の多量の巨礫で埋まっていた(②)。巨礫の間からは、土師器や須恵器が出土しており、河川上流の古代集落を巻き込んだ土石流によりもたらされた可能性があります。



出土遺物は、土師器と製塩土器、須恵器が主で、近接するカウヤ遺跡と類似しています。製塩土器は、外面に粘土紐の積み上げ痕を残し、内面全体と口縁部を刷毛目調整するのが特徴です(③)。また、出土した土師器小片の多くも製塩土器の可能性もあります。

検出した焼土遺構は、製塩に関わる遺構と推測され、周辺一帯で平安時代に大規模な製塩を行っていたと考えられます。秋田県内では、にかほ市や由利本荘市などの沿岸部で製塩土器の出土例はありますが、炉などの遺構が見つかるのは珍しく、カウヤ遺跡とともに貴重な資料といえます。調査区からは扁平な石が出土しており、本来は石組の炉であったものが土石流や削平によって石が周囲に散逸したと推測されます。

今回の調査で、寺沢遺跡は製塩を行っていた生産遺跡であることが分かりました。鉄滓が数点出土していることから、製塩以外にも製鉄関連作業を行っていた可能性もあります。今後、遺物の整理と遺構の分析を行い、周辺遺跡との関連性を調査し、寺沢遺跡の性格や特徴を明らかにしていきたいと思えます。



# 立浪遺跡

湯沢市下院内字立浪

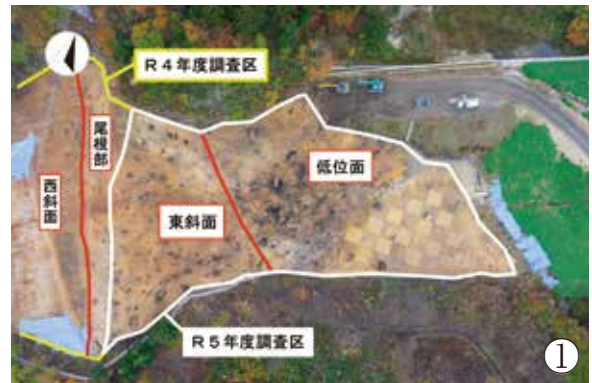
立浪遺跡はJR院内駅から東に1.4km、<sup>えぼしやま</sup>鳥帽子山山地の北東端に立地し、標高は167～182mです。国道13号横堀道路雄勝こまちIC以南の高速道路建設工事に伴う発掘調査が2か年にわたり行われました。対象範囲7,900㎡のうち、2年目である今年度は東側斜面と低位面合わせて4,000㎡の調査を行いました (①)。

調査の結果、<sup>どこう</sup>土坑や<sup>おと</sup>陥し穴状遺構等が検出されました。

東側斜面では西側斜面と同様に多くの土器や石器等が出土し、捨て場として利用されていたことが分かりました (②)。その量は180コンテナ約160箱分に上ります。縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代の土器が出土しました。石器の中には<sup>けつじょうみみかざり</sup>玦状耳飾 (③) や長さ90cm、幅60cmの大形の<sup>いし</sup>石ざら皿等、周辺の遺跡ではあまり見られないものもありました。また、板状の土偶も出土しました。これらは前期中葉のもので、とくに土偶は県内でも最古級のものになりそうです。

低位面では長さ1.3m、幅1.1m、深さ0.6mの土坑 (④) が検出されました。出土土器から縄文時代晩期の土坑と考えており、昨年度検出された尾根頂部の同じ時期の土坑と同様にお墓であったと考えています。

2か年にわたる調査成果から、遺跡は縄文時代前期、さらに後期から弥生時代にかけて断続的に利用された捨て場または石器製作の場であったと考えています。また、縄文時代晩期には尾根頂部を中心に<sup>たてあなたてもものあと</sup>竪穴建物跡やお墓も造られていたようです。今後、遺構・遺物の変遷や周辺の遺跡との比較検討を進めながら、出土した遺物の整理と遺構の分析を通して、遺跡の性格を明らかにしていきたいと思ひます。



# 坂三塔遺跡

## 横手市十文字町越前字坂三塔

坂三塔遺跡は、湯沢横手道路十文字ICから西へ約4.5km、標高約65mの皆瀬川扇状地に立地しています(①)。遺跡の南西約300mには縄文時代晩期の土器が確認された二ツ橋遺跡が、北1kmには中世城館である鍋倉城跡が位置しています。遺跡は県道拡幅工事に伴う分布調査で発見され、850㎡の発掘調査を実施しました。



調査の結果、縄文時代・古代・中世の複合遺跡であることが分かりました。

縄文時代の遺構は、<sup>おと</sup>陥し穴状遺構、<sup>どこう</sup>フラスコ状土坑、<sup>みぞあと</sup>土坑、<sup>ちゅうけつよう</sup>溝跡、柱穴様ピットが確認されています。フラスコ状土坑は調査区の北側と中央付近で2基見つかり、そのうち1基の埋土中から縄文時代晩期の<sup>あさぼち</sup>浅鉢形土器と<sup>ふかぼち</sup>深鉢形土器の底部が見つかりました(②)。

古代の遺構は、溝跡が2条確認され、そのうちの1条は調査区中央に位置し、半径2.3mの半円状に弧を描き東の調査区外へと続いています(③)。この続きが同じ半円で全体として円形になるのであれば、古代のお墓である<sup>えんけいしゅうこうぼ</sup>円形周溝墓の可能性が考えられます。中世の遺構は、溝跡が1条、カマド状遺構1基、柱穴様ピット65基が確認されています。

今回発掘調査を行った範囲は幅が狭く、溝跡がどこまで広がっているか確認することはできませんでした。今後は、確認された遺構がどのような役割をもっていたのか検討していきます。





# 本荘城跡

## 由利本荘市尾崎



本荘城跡は、現在の本荘公園、由利本荘市役所南に隣接した標高30m、子吉丘陵先端にある独立丘陵、通称尾崎山を中心とした範囲にあります。台地上に本丸と二の丸(①)、市役所を含めた北側平坦地に三の丸を置き、さらに北の子吉川に向かって城下町を広げています。

本荘城跡は中世から存在し、関ヶ原の戦い後に、近世城郭として

最上氏が改修、家臣である本城氏が入部し、最上氏改易により元和8(1622)年に廃城となりますが、翌年六郷氏が入部・再築し、明治時代を迎えます。

平成13～19年にかけて、由利本荘市によって本丸及び三の丸の一部が調査され、本丸では弓櫓跡や板塀等の他、一部中世の建物跡や井戸跡等が、三の丸では当時のゴミ穴が見つかっています。

今回、国道107号に隣接する二の丸を中心とした4,200㎡のうち、194㎡を調査しました。



調査区は平坦地である郭、それに付随する斜面に分かれます。郭北側には現在も水を湛える三日月堀があります。調査で、斜面を含めた郭東側の一部を掘り下げたところ、盛土は0.8～1.6m、場所によってはさらに土を盛って平坦地を造成していることが分かりました(②)。また堀に隣接する範囲を地山まで掘り下げたところ、最大幅1.8m、長さ18m以上の空堀が東西に走っていることが分かりました。埋土から出土した17世紀前半代の波佐見(長崎県)産の青磁から、空堀は廃城時か六郷氏再築期に埋められたと思われます。これにより、本城氏段階では、中世の名残を残す空堀があった可能性が高いことが分かりましたが、慶長末～元和期の様子を描いた本城城下絵図では、三日月堀を含む水堀が二の丸南側から西側の大半を占めており、調査結果と絵図では様相が異なることが分かりました。

また、それ以降の絵図では、二の丸全体に塀が立ち並びますが、調査でその痕跡は確認できませんでした。出土遺物も空堀の埋め戻し土や盛土から縄文土器や石器、平安時代の土師器の他、中近世の陶磁器が数点出土するのみで、近世期の活動を示す遺物がわずかしかなかった。人々が在番する施設がないことが、遺物の少なさに影響していると思われます。

今回の未調査分は、来年度に調査が行われます。近世を通じた郭の使われ方がより明確になるとともに、盛土の観察から当時の土木技法などが、より一層明らかになるものと思われます。

うわ の こ だて あと りん せつ ち  
上野小館跡隣接地

うわ の あざ うわ の  
由利本荘市上野字上野



上野小館跡隣接地は、JR羽越本線羽後本荘駅から南東約4.5km、国道107号バイパスの万願寺交差点から南東に通じる旧道沿いにあり、上野集落西端にある郵便局北東の丘陵上に位置します(①)。調査地は、バイパス南側に隣接する東西に長い脊せ尾根の万願寺丘陵南側です。中央最高地点の標高が84mで南東側低位面から舌状に緩く展開する平坦な丘陵上に当たります。また、東側には水田を挟んで大日靈神社が鎮座しています。

遺跡の南側には、大きく蛇行し西流する石沢川が南西約1.5kmで子吉川と



合流し、その南と北側には水田が広がっています。合流点から北の子吉川右岸には、古代条里制で間々認められる「三条」やその北に条里の坪を想定させる「二十六木」の地名があります。またこの周辺は、本荘地区の南側から前回調査地として臨んだ土谷地区に渡って古代道が推定されています。調査地を含む一体は国道107号沿いにあり、近年古代雄勝城推定地として注目される横手市雄物川町造山地区に至る入口に当たります。以上の諸点と、由理柵を起点とした横手盆地の開拓を踏まえて、上野小館跡の隣接地を調査地区に選定しました。調査区対象地には、1m幅の細長い試掘溝の他、2～3m四方の調査区を設定する等、合わせて5か所の発掘調査を実施しました。

その結果、遺物は縄文時代の石器剥片が僅かに出土しただけで、古代に繋がる遺物は皆無でした。しかし、遺構は検出されなかったものの現況では丘陵部の縁に沿うように北西から南東側、更に東側に屈曲する裾部約3m前後、高さ0.5～1mの土塁状の高まりが確認されています(②)。近隣に上野小館跡、万願寺館跡等の館跡が存在することから、それとの関連性も考えられます。

(由理柵・駅家研究会)



## なが おか もり だて 長岡森館

## かね ざわ あざ にし なが おか もり 仙北郡美郷町金沢字西長岡森

長岡森館（①）は、横手市との境に位置する美郷町金沢地区の長岡森丘陵地の南西部、中ノ目川の北岸に位置する遺跡で、現況は山林となっています。

美郷町では平成25年度（2013年度）から横手市と連携し、後三年合戦を核とした観光交流や歴史検証を行う事業を始めました。この事業は、次の2つからなり、1つ

は、後三年合戦関連遺跡が分布する可能性が高い町の東側山麓部の詳細分布調査、もう1つは、町内に残る清原氏の歴史・伝承を学習する団体「後三年合戦みさとプロジェクト」の設立と活動です。特に、町の詳細分布調査は、これまで平野部でのほ場整備に係るものがほとんどで、山麓部では調査が行き届いていない状況でした。また、近年は山林の間伐をはじめとする開発行為の問い合わせが相次いでおり、関連遺跡の調査を通じて、こうした案件にも対応できると考えております。

長岡森館もこの事業の一環で、平成27年（2017年）に美郷町金沢地区の独立丘陵を踏査したところ、地形の特徴から発見されました。遺跡内の一部を下刈りし、専門家に縄張図作成を依頼したところ、空堀・土橋の跡が残る単郭周壕型の城館跡であることが判明しました。ただ、長岡森館がいつの時代の遺跡なのかは不明であり、町では後三年合戦に関連する城館跡の可能性も含め、令和5年度は空堀跡付近に2か所のトレンチを設定して試掘調査を行いました。

調査の結果、今後の資料となる基本土層および地山面の確認をすることができました。1トレンチ（②）では、上幅2.5m・下幅1.2m・深さ0.7mの空堀跡を検出、埋土は地山由来の土が堆積していることが分かりました。また、この空堀跡を挟んだ北側と南側からは盛土層が見つかりました。盛土層は北側・南側とも空堀に向かって崩れるように堆積しており、また空堀と基盤層との境にあたる土層からは炭化物をわずかながら検出しました。2トレンチ（③）では中央部分から、埋土時期を2つに分層できる整地層が検出されました。この整地層は、埋土中の柱穴様ピットの確認面（Ⅰ期）、地山面に近い柱穴様ピットの確認面（Ⅱ期）の2時期です。北側断面ではⅠ期の土色と同じ柱穴様ピットを検出し、1トレンチで見つかった空堀跡と思われる落ち込みは2トレンチでは見つかりませんでした。

今回の調査を踏まえて、長岡森館が埋土状況から何らかの拠点として人工的に造成された場所であること、長岡森館の空堀が周囲に張り巡らされたものではないことが分かりました。ただ、今年度の調査で遺物が出土しなかったことから、来年度以降は時期の特定を目的に、平坦部の調査を実施したいと考えております。

（美郷町教育委員会）



# 年 表

年 代	時 代	県内の主な遺跡	秋田県の歴史	日本の歴史
約35,000年前	旧石器時代	縄手下遺跡（能代市） 才ノ神遺跡（由利本荘市） 家の下遺跡（三種町） 風無台Ⅰ遺跡（秋田市） 米ヶ森遺跡（大仙市）	秋田県に人が住みつき、ナイフ形石器や台形石器を使う。	日本列島に人が住みつき、石器を使った狩猟生活を行う。
約13,000年前 約9,000年前	縄 文 時 代	草創期 岩瀬遺跡（横手市）	大型の堅穴建物がつくられる。 地方色豊かな円筒土器、大木式土器がつけられる。	土器づくりや弓矢の使用が始まる。 移動生活から定住するようになる。
約7,000年前		早期 根下戸道下遺跡（大館市） ◎岩井堂洞窟（湯沢市） 葛蒲崎貝塚（由利本荘市）		
約5,000年前		前期 大巻Ⅰ遺跡（秋田市） 立浪遺跡（湯沢市） 上ノ山Ⅱ遺跡（大仙市） ラフキ遺跡（にかほ市） ◎杉沢台遺跡（能代市）		
約4,000年前		中期 菜萁ノ木遺跡（能代市） ○壹刈沢貝塚（三種町） ○一丈木遺跡（美郷町） 福島遺跡（羽後町） 天戸森遺跡（鹿角市） 大道遺跡（にかほ市）		
約3,000年前		後期 ●大湯環状列石（鹿角市） ◎伊勢堂岱遺跡（北秋田市） 漆下遺跡（北秋田市）		
約2,300年前	晩期 白坂遺跡（北秋田市） ○柏子所貝塚（能代市） 戸平川遺跡（秋田市） ○矢石館遺跡（大館市） ○湯出野遺跡（由利本荘市） 鏡田遺跡（湯沢市） 坂三塔遺跡（横手市）	大規模な共同墓地がつけられる。	北海道・北東北の各地で環状列石がつけられる。 関東で環状の貝塚がつけられる。 亀ヶ岡文化が栄える。 遮光器土偶が増加する。 九州で水田稲作が始まる。	
約2,300年前	弥生時代	◎地蔵田遺跡（秋田市） 横長根A遺跡（男鹿市）	狩猟・採集を中心とする生活に稲作が加わる。	邪馬台国の卑弥呼が中国に使いを送る。
約1,700年前	古墳時代	寒川Ⅱ遺跡（能代市） 蟹沢遺跡（横手市） 田久保下遺跡（横手市） 下藤根遺跡（横手市）	北海道と同じ土器や墓がつけられる。	前方後円墳がつけられる。
	飛鳥時代			律令政治が始まる。
西暦710年	古 代	奈良時代 ◎秋田城跡（秋田市） 十足馬場南遺跡（横手市） 竹原窯跡（横手市） ○岩野山古墳群（五城目町）	出羽国を置く。 出羽柵を秋田村高清水岡に遷す。 雄勝城、由理柵がつけられる。	平城京に都を遷す。 和同開珎がつけられる。 東大寺の大仏が建立される。
794年		平安時代 ◎弘田柵跡（大仙市・美郷町） ○横山遺跡（由利本荘市） 胡桃館遺跡（北秋田市） 寺沢遺跡（にかほ市） 行ヒ森遺跡（にかほ市） 金沢城跡（横手市） ◎大鳥井山遺跡（横手市） ○矢立廃寺跡（大館市）	元慶の乱が起こる。 十和田火山が噴火する。 （十和田a火山灰層） 清原氏が栄える。 前九年・後三年合戦が起こる。	平安京に都を遷す。 坂上田村麻呂が征夷大将軍となる。 平将門の乱が起こる。 源氏物語・枕草子が書かれる。 平泉に藤原氏が栄える。
1185年	中 世	鎌倉時代 ○大畑古窯跡（大仙市） 観音寺廃寺跡（横手市） 堂の下遺跡（三種町）	鎌倉御家人が秋田に入る。	源頼朝が鎌倉幕府を開く。 承久の乱が起こる。 元寇が起こる。
1338年		室町時代 後城遺跡（秋田市） 童毛沢館跡（能代市） ◎檀山安東氏城館跡（能代市）	秋田湊が栄える。	足利尊氏が室町幕府を開く。 応仁の乱が起こる。
1573年	安土桃山時代	○山根館跡（にかほ市） ○戸沢氏城館跡（仙北市） ○本堂城跡（美郷町） ○豊島館跡（秋田市） ◎脇本城跡（男鹿市）	安東氏、小野寺氏、浅利氏、戸沢氏、六郷氏などが各地で戦う。	織田信長が安土城を築く。 豊臣秀吉が天下を統一する。 関ヶ原の戦いが起こる。
1603年	近 世	江戸時代 久保田城跡（秋田市） 大館城跡（大館市） 本荘城跡（由利本荘市） △旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園（秋田市） ○白岩焼窯跡（仙北市）	佐竹義宣が秋田に転封される。	徳川家康が江戸幕府を開く。
時期不明		上野小館跡隣接地（由利本荘市） 長岡森館（美郷町）		

太字は報告遺跡

●国指定特別史跡

◎国指定史跡

△国指定名勝

○県指定史跡



**令和5年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料**

発 行 令和6年3月9日

編集・発行 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電 話 0187-69-3331

F A X 0187-69-3330

<https://common3.pref.akita.lg.jp/maibun/>



シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。  
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。